

日蓮大聖人御書全集

おおたにゆうどうどのごへんじ

太田入道殿御返事

新版
1358
〜
1363

おおたにゆうどうどのごへんじ

太田入道殿御返事

けんじがんねん

建治元年(75)

がつ ちち

11月3日

さい

54歳

おおたじようみよう

大田乗明

きさつ

貴札、これを開いて拝見す。御痛みのこと、一たびは歎き、

ひら

はいけん

おんいた

ひと

なげ

に よろこ

二たびは悦びぬ。

ゆいまきつきよう

維摩詰経に云わく「その時、長者・維摩詰、自ら念え

い

とき

ちようじや

ゆいまきつ

みずか

おも

い

とこ

や

らく『寝ねて牀に疾む』。その時、仏、文殊師利に告げた

とき

ほとけ

もんじゆしり

つ

なんじ

ゆいまきつ

ぎようけい

やまい

と

うんぬん

まわく『汝、維摩詰に行詣して疾を問え』と云々。

だいねはんぎよう

い

とき

によらいなしいしみ

やまいあ

げん

大涅槃経に云わく「その時、如来乃至身に疾有るを現じ、

みぎわき

ふ

か

びようにん

うんぬん

ほけきよう

右脇にして臥したもう。彼の病人のごとくす」云々。法華経

い しょうびようしようのう うんぬん しかん だいはち い びや
に云わく「少病少恼」云々。止観の第八に云わく「毘耶

えんが やまい たく おし おこ ないしによらい
に偃臥するがごときは、疾に託して教えを興す乃至如来は

めつ よ じょう だん やまい よ ちから と うんぬん
滅に寄せて常を談じ、病に因つて力を説く」云々。

い やまい お いんねん あ むつ あ いち
また云わく「病の起こる因縁を明かすに、六つ有り。一

しだい じゆん ゆえ や に おんじき せつ
には四大の順ならざるが故に病む。二には飲食の節ならざ

ゆえ や さん ざぜん とこの ゆえ や し
るが故に病む。三には坐禅の調わざるが故に病む。四には

きたよ う ご ま しよい ろく ごう お ゆえ
鬼便りを得。五には魔の所為なり。六には業の起こるが故に

や うんぬん だいねはんぎよう い よ さんになん やまい じ がた
病む」云々。大涅槃経に云わく「世に三人のその病治し難

あ いち だいじよう ぼう に こぎやくざい さん
きもの有り。一には大乘を謗ず。二には五逆罪あり。三に

いっせんだい

さんびよう

よ

なか

ごくじゅう

は一闡提なり。かくのごとき三病は、世の中の極重なり」

うんぬん

い

こんぜ

あくごうじようじゆ

ないしかなら

まさ

じごく

云々。また云わく「今世に悪業成就し乃至必ず応に地獄な

ないしさんぼう

くよう

ゆえ

じごく

お

げんぜ

るべし乃至三宝を供養するが故に、地獄に墮ちずして現世

むく

う

ごうべ

め

せ

いた

とううんぬん

に報いを受く。いわゆる頭と目と背との痛みなり」等云々。

しかん

い

じゆうざいあ

ないしにんちゆう

かる

つくな

止観に云わく「もし重罪有るも乃至人中に軽く償う。こ

ごう

しゃ

ほつ

ゆえ

や

うんぬん

れはこれ業の謝せんと欲するが故に病むなり」云々。

りゆうじゆぼさつ

だいろん

い

と

い

竜樹菩薩、大論に云わく「問うて云わく、もししからば、

けこんきようないしはんにははらみつ

ひみつ

ほう

ほつけ

華嚴経乃至般若波羅蜜は秘密の法にあらず。しかるに法華

とう

ないしたと

だいやくし

よ

どく

へん

くすり

等は乃至譬えば、大薬師の能く毒を変じて薬となすがごと

し」云々。天台、この論を承けて云わく「譬えば、良医の能

うんぬん てんたい ろん う たい しょうい よ

く毒を変じて薬となすがごとし乃至今経に記を得るは、

すなわ かく へん くすり ないしこんきよう き う

即ちこれ毒を変じて薬となす。故に、論に云わく『余経は

ひみつ かく へん くすり ゆえ ろん い よきよう

秘密にあらず、法華を秘密となす』と」云々。止観に云わ

ひみつ ほつけ よみつ ほつけ ひみつ うんぬん しかん い

く「法華能く治す。また称して妙となす」云々。妙楽云

く ほつけ よ じ しょう みよう うんぬん みようらくい

わく「治し難きを能く治す。ゆえに妙と称す」云々。

わく じ がた よ じ みよう しょう うんぬん

大経に云わく「その時、王舎大城の阿闍世王その性弊

だいきよう い とき おうしやだいじよう あじやせおう しょうへい

悪にして乃至父を害し已わつて、心に悔熱を生ず乃至心

あく ないしちち がい お こころ けねつ しょう ないしこころ

悔熱するが故に、遍体に瘡を生ず。その瘡、臭穢にして附近

けねつ ゆえ へんたい かさ しょう かさ しゆえ ふごん

すべからず。その時とき、その母にして韋提希ははと字いだいけづくるもの

しゆじゆ くすり

は、種々の薬をもつてためにこれを傳つく。その瘡かさ、ついに

ま ごうそん あ

おうすなわ はは もう

増して降損有ることなし。王即ち母に白す。『かくのごと

かさ こころ したが

しよう

しだい

お

き瘡は心に従つて生ず。四大より起こるにはあらず。も

しゆじよう よ じ

ものあ

い

ことわりあ

し衆生に能く治する者有りと言わば、この処有ることな

うんぬん

とき

せそん

だいひどうし

あじやせおう

けん』と云々。「その時、世尊・大悲導師、阿闍世王のた

がつあいざんまい

い

さんまい

い

お

だいこうみよう

はな

めに月愛三昧に入り、三昧に入り已わつて、大光明を放ち

ひかり しょうりよう

い

おう

み

て

たもう。その光、清涼にして、往つて王の身を照らすに、

み かさすなわ い

うんぬん

びようどうだいえ

みようほうれんげきよう

だいしち

身の瘡即ち愈えぬ」云々。平等大慧の妙法蓮華経の第七

いに云いわく「この経きようは則すなわちこれ閻浮提えんぶだいの人の病ひと やまいの良薬ろうやくなり。

もし人病ひとやまい有あらんひとやまいに、この経きようを聞きくことを得えば、病やまいは即すなわち

消滅しょうめつして、不老不死ふろうふしならんうんぬん」云々。

已上いじよう、上かみの諸文しよもんを引ひいて、ここおんやまいに御病かんがを勘くわうるに、六病ろくびよう

を出いでず。その中なかの五病ごびようはしばらくこれを置おく。第六だいろくの

業病ごうびよう、最もつとも治じし難がたし。はたまた、業病ごうびように軽かるき有あり重おもき有あ

つて、多少たししようさだ定さだまらず。なかんほつけひぼうずく、法華ごうびよう誹さい謗だいいちの業病ごうびよう、最さい第一だいいち

なり。神農しんのう・黄帝こうてい・華佗かだ・扁鵲へんじやくも手てを拱こまねき、持水じすい・流水るすい・

耆婆ぎば・維摩ゆいまも口くちを閉とず。ただ釈尊しやくそんいちぶつ一仏みようきようの妙経ろうやくの良薬かぎに限

つてこれを治す。

ほけきよう

い

かみ

だいねはんぎよう

ほけきよう

さ

法華經に云わく、上のごとし。

大涅槃經に法華經を指し

い

しょうほう

きぼう

よ

みずか

かいげ

て云わく「もし、この正法を毀謗するも、能く自ら改悔し、

しょうほう

げんき

ないし

しょうほう

のぞ

正法に還歸することあらば乃至この正法を除いてさらに

くご

ゆえ

まさ

しょうほう

げんき

救護することなし。この故に应当に正法に還歸すべし」

うんぬん

けいけいだいしい

だいきようみずか

ほっけ

さ

ごく

云々。荊溪大師云わく「大經自ら法華を指して極となす」

うんぬん

い

ひと

ち

たお

かえ

ち

お

云々。また云わく「人の地に倒れて、還つて地より起くる

ゆえ

しょう

ぼう

じゃ

だ

せつ

うんぬん

がごとし。故に正の謗をもつて邪の墮を接す」云々。

せしんぼさつ

もとしょうじよう

ろんじ

ごじく

だいじよう

とど

世親菩薩は本小乗の論師なり。五竺の大乗を止めんが

ために、五百部の小乗論を造る。後に無著菩薩に値い奉

つて、たちまちに邪見を翻し、一時にこの罪を滅せんが

ために、著に向かつて、舌を切らんと欲す。著、止めて云

わく「汝、その舌をもつて大乘を讚歎せよ」。親、たちま

ちに五百部の大乘論を造つて小乗を破失す。また一つの

願を制立せり。「我、一生の間、小乗を舌の上に置か

じ」。しかして後、罪滅して弥勒の天に生ず。

馬鳴菩薩は東印度の人、付法蔵の第十三に列なれり。本

外道の長たりし時、勒比丘と内外の邪正を論ずるに、その

心言下に解けて、重科を遮せんがために、自らの頭を勿

ねんと擬す。謂うところは「我、我に敵して墮獄せしめん」。

勒比丘、諫め止めて云わく「汝、頭を切ることなかれ。

その頭と口とをもつて大乘を讚歎せよ」。鳴、急やかに起

信論を造つて外小を破失せり。月氏の大乗の初めなり。

嘉祥寺の吉蔵大師は漢土第一の名匠、三論宗の元祖な

り。呉会に独歩し、慢幢最も高し。天台大師に対して已今

当の文を諍い、たちどころに邪執を翻破し、謗人・謗法の

重罪を滅せんがために、百余人の高德を相語らい、智者

だいし くつしよう

み につきよう

こうべ

りようあし

う

大師を屈請して、身を肉橋となし、頭に両足を承く。

しちねん

あいだ

たきぎ

と

みず

く

こう

はい

しゆ

さん

まんどう

七年の間、薪を採り水を汲み、講を廃し衆を散じ、慢幢を

たお

ほけきよう

じゆ

だいし

めつご

ずいてい

おうけい

倒さんがために、法華経を誦せず。大師の滅後、隋帝に往詣

そうそく

きようしよう

なみだ

なが

わか

つ

こきよう

するに、双足を按撰し、涙を流して別れを告げ、古鏡を

けんけん

じよう

しんじよく

観見して自影を慎辱す。

ごうびよう

めつ

ほつ

かみ

さんげ

業病を滅せんと欲して上のごとく懺悔す。

そ おも

いちじよう

みようきよう

さんしよう

きんげん

いこん

夫れ以んみれば、一乗の妙経は三聖の金言なり、已今

とう

みようじゆ

しよきよう

いただき

こ

当の明珠は諸経の頂に居す。

きよう

い

しよきよう

なか

もつと

かみ

あ

経に云わく「諸経の中において最もその上に在り」。

また云わく「法華は最も第一なり」。伝教大師云わく

「仏立宗」云々。

予、随分、大・金・地等の諸の真言の経を勘えたる

に、あえてこの文の会通の明文無し。ただ、畏・智・空・

法・覚・証等の曲会に見えたり。ここに知んぬ、釈尊・大日

の本意は、限つて法華の最上に在るなり。しかるに、本朝

真言の元祖たる法・覚・証等の三大師、入唐の時、畏・智・

空等の三三蔵の誑惑を果・全等に相承して帰朝了わんぬ。

法華・真言弘通の時、三説超過の一乗の明月を隠して真言

りようかい ほたるび あらわ

ほけきよう めり い

両界の螢火を顕し、あまつさえ法華経を罵詈して曰わく

けるん むみよう へんいき じがい みようご い

「戲論なり、無明の辺域なり」。自害の謬誤に曰わく

だいにちきよう けるん むみよう へんいき ほんしすで ま

「大日経は戲論なり、無明の辺域なり」。本師既に曲がれ

まつよう なお みなもとにぞい なが きよ とう

り、末葉あに直からんや。「源濁れば流れ清からず」等と

い にほんひき やみよ ふそうつい

はこの謂いか。これによつて日本久しく闇夜となり、扶桑終

たこく しも か ほつ

に他国の霜に枯れんと欲す。

きへん ちやくちやく まつりゆう いちぶん

そもそも、貴辺は嫡々の末流の一分にあらずといえど

だんな しよじゆう み じゃけ しょ としひき

も、はたまた檀那の所従なり。身は邪家に処して年久しく、

こころ じゃし そ つきかさ たいざん くず

心は邪師に染まつて月重なる。たとい大山は頽るとも、た

たいかい かわ

とい大海は乾くとも、この罪は消え難きか。しかりといえ

しゆくえん もよお

ども、宿縁の催すところ、また今生に慈悲の薫ずるとこ

ぞんがい ひんどう

ちぐ

かいげ

ほつき

ゆえ

みらい

く

ろ、存外に貧道に値遇して改悔を發起す。故に、未来の苦を

つぐな

げんざい

けいそうしゆつげん

償って現在に軽瘡出現せるか。

か じゃおう

しんそう

こぎやく

ひほう

にざい

まね

彼の闍王の身瘡は、五逆・誹法の二罪の招くところなり。

ほとけ

がつあいざんまい

い

みて

あくそう

仏、月愛三昧に入つてその身を照らしたまえば、悪瘡たち

き

さんしちにち

たんじゆ

の

しじゆうねん

ほうさん

たも

か

まちに消え、三七日の短寿を延べて四十年の宝算を保ち、兼

せんにん

らかん

くつしよう

いちだい

きんげん

か

あらわ

ねてはまた、千人の羅漢を屈請して一代の金言を書き顕

しようぞうまつ

るふ

ぜんもん

あくそう

ほうぼう

いっか

し、正像末に流布せり。この禅門の悪瘡は、ただ謗法の一科

なり。所持の妙法は月愛に超過す。あに輕瘡を愈やして

ちようじゆ まね

ことば しるしな

こえ おこ

長寿を招かざらんや。この語、徴無くんば、声を発して

いつさいせけんげん

だいもうご

ひと

いちじようみようきよう

きご

てん

「一切世間眼は大妄語の人、一乗妙経は綺語の典なり。

な お

せそんしるし

あらわ

ちか

おそ

名を惜しみたまわば世尊験を顕し、誓いを恐れたまわば

もろもろ

けんしようきた

まも

きようかん

い

諸の賢聖来り護りたまえ」と叫喚したまえと、しか云う。

しよ ことば

つ

ことば

こころ

つ

ことごとげんざん

とき

書は言を尽くさず、言は心を尽くさず。事々見参の時

し

きようきようきんげん

を期せん。恐々謹言。

じゆういちがつみつか

十一月三日

にちれん

かおう

日蓮

花押

おおたにゆうどうどのごへんじ

太田入道殿御返事